

2007 年度サイエンスコミュニケーション学生スタッフの活動報告

自然科学センター・教授・木原 章

法政大学自然科学センターでは 2007 年度から、市ヶ谷地区の学生を対象とした、「サイエンスコミュニケーション学生スタッフ」の活動を開始した。もともと、文科系の学生を対象とした授業を担当していると言う点で、自然科学センターの教員スタッフにとって「サイエンスコミュニケーション」は日常的な業務である授業に近い。従って、逆の意味で、非日常の（すなわち、授業以外の）企画としてサイエンスコミュニケーションを成立させるためには、一体何が必要なのかと言う戸惑いがあった。そこで、先ず学生たちを集めて、彼らが「理科」について何を知りたいのかを問う会を開く事にした。

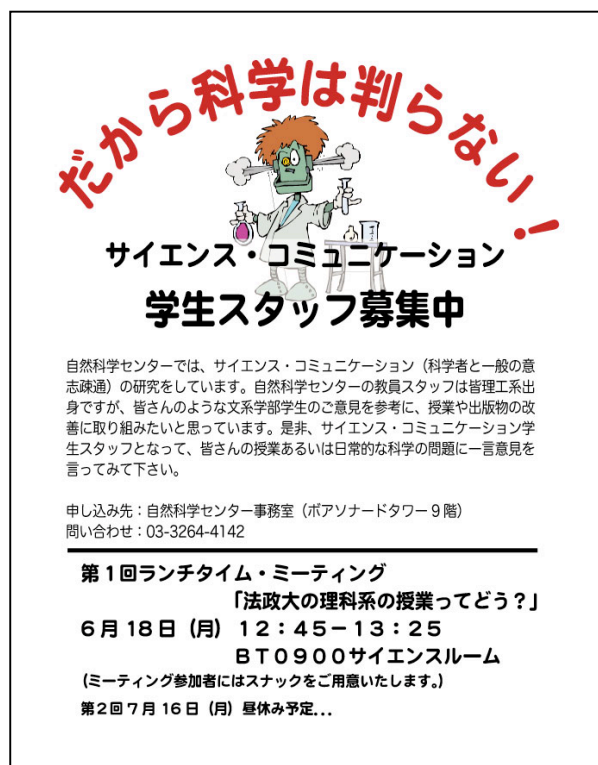
2007 年 6 月 18 日（月）第 1 回ランチタイムミーティング

「法政大の理科系の授業ってどう？」と言うタイトルで、学生の意見を真摯に受け止めようとミーティングを開いた。既に、サイエンス・パートナーシップ・プロジェクトの TA 等で、自然科学センターの行事に参加していた学生の他、授業で興味を持ってくれた学生等 10 名の学生が参加してくれた。学生の貴重な昼休み時間なので、軽食を用意してできるだけ効率的に意見交換ができるように配慮した。

そこで行なわれた意見交換の内容は、当初の予想をくつがえす内容だった。当初、文科系の学生に理科の必要性を感じさせるために、どの様な興味付けが必要かと言う点が一つのテーマのつもりだった。学生の授業批判を聴く事で、その解決策となる様なサイエンスコミュニケーション活動への発展を考えていた。しかし、実際にふたを開けてみると、多くの学生が、彼らが小学生時代に習った「純粋理科」の授業が一番楽しかったと言う話しになってきた。特に、理科実験が印象に強く残っていると言う。そう言った話しになると、もともと小学校時代に理科を得意として、結果として理科系の分野に進んだ教員との接点はおのずと明らかだ。そこで、次回以降どんな理科実験をしてみたいか？と言う問題に取り組む事になった。

2007 年 7 月 16 日（月）第 2 回ランチタイムミーティング

「文科系学生が計画する理科実験」と言うタイトルで、実際に理科実験のイベントを計画するプロセスに入った。参加学生数も 14 名に増え、実際にやってみようという実験



だから科学は判らない!

サイエンス・コミュニケーション

学生スタッフ募集中

自然科学センターでは、サイエンス・コミュニケーション（科学者と一般の意志疎通）の研究をしています。自然科学センターの教員スタッフは皆理工系出身ですが、皆さんのような文系学部学生のご意見を参考に、授業や出版物の改善に取り組みたいと思っています。是非、サイエンス・コミュニケーション学生スタッフとなって、皆さんの授業あるいは日常的な科学の問題に一言意見を言ってみてください。

申し込み先：自然科学センター事務局（ポアソナードタワー 9 階）
問い合わせ：03-3264-4142

第 1 回ランチタイム・ミーティング

「法政大の理科系の授業ってどう？」

6 月 18 日（月） 12：45 - 13：25

BT0900サイエンスルーム

（ミーティング参加者にはスナックをご用意いたします。）

第 2 回 7 月 16 日（月） 昼休み予定...

について活発な意見交換が行われた。そこで、最も人気があったのが、液体窒素を使った実験であった。アンケート結果では、第1位 超低温の世界を体験、第2位 味覚の不思議、第3位 地質調査で化石発掘、同率3位 重曹でカルメ焼き、第5位 染料の抽出と染色のメカニズムとなった。以上の結果にもとづいて、液体窒素を使った実験を実際に行う事になった。

2007年7月30日(火) 実験「超低温の世界」

化学研究室と物理研究室で既に授業や研究に用いている機材を使って、液体窒素で色々凍らせてみる実験を行った。当日は、学生が11名参加し、こちらであらかじめ用意した風船や超伝導実験用具の他に、学生が持ち寄った花やお菓子を凍らせてみたりした。更に、アイスクリームの作製も行ってみた。



この企画は、教員も含め随分楽しむ事ができた。やはり、理科の世界には新鮮な驚きと好奇心こそがよく似合う。更に、この経験を元に9月のオープンキャンパスでは、高校生を対象に本学の文科系学生が理科実験を披露するという斬新な計画が生まれた。

2007年9月オープンキャンパス「科学工房 マイナス196℃ ～窒素とアイスが出会いました」

9月30日(日)のオープンキャンパスでの理科実験企画のために、9月26日、29日と準備を行い、当日は100名以上の来客を得るだけの盛大な企画へと発展した。文科系の学生が、文科系の大学を受ける受験生を対象に行う「サイエンスカフェ」という位置づけで、極めてユニークな試みであったが、会場の盛況さには驚かされるものがあった。



2007年10月8日（月）第4回ランチタイムミーティング

大きなイベントも終わり、次の企画を練るためにミーティングを行った。参加学生数は7名で、新たな企画はなかなか出てこない状況であった。そこで、11月に行なわれるサイエンスアゴラ参加計画を練り始める事となった。

2007年11月23～25日サイエンスアゴラ・ポスター展示

10月24日のランチタイムミーティングから4回の準備期間を経て、サイエンスアゴラのポスターを製作した。当日は、3名の学生と共に、現地へポスター展示と参加者同士の質疑応答を行った。現場でも、極めてユニークな活動として注目を集めた事は言うまでも無い。



今後の活動にむけて...

学部も無い、授業でも無い、ゼミでも無い、そんな活動にどの様に学生が参加してくれるのか、全く予想のつかないままに始めた。1年を経過してみるとそれなりの成果が得られた気がする。学生を集める基本は「面白い、興味深い」と言う、まさに理科教育の原点にあった。

今後、どの様な形態でこの学生スタッフ活動を継続すれば良いか？必ずしも簡単な答えは用意されていそうもない。実験科学に携わってきた者の立場で言うならば、一つの実験が更に次の疑問を生み、そして次の実験へと向わせる、そういった流れができれば良いかと思う。そのためには、やはり学生がその場その場で何を感じ、何に興味を持ったのか、継続的に観察し続けて行く事が重要である。来年度以降も、この試みを続ける事で、何らかの「正解」が見えてくるような気がした。

なを、今年度の活動に際して、多くの教員スタッフ、事務スタッフの協力を得られた事に、この場を借りて感謝の意を表したい。

(2008年3月11日)

